慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	江戸板木繪一囘の開花期
Sub Title	The first flourishing of woodcut prints in Edo
Author	澁井, 清(Shibui, Kiyoshi)
Publisher	慶應義塾大学文学部藝文学会
Publication year	1951
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.1, (1951. 12) ,p.43- 56
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	美術学特集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00010001-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

江戸板木繪第一回の開花期

澁井清

「命もしんぞきへなばきへよ、その投節の古に、かの菱川が十二番を寫してより、流は絕えずして、しかも原の畫風にあらず」と方丈記めかした一文が、幕末の或本に記されてゐる。

この甚だ不明瞭な、解つたような解からないところが面白いと言つたら、知性人は嗤ふであらう！

菱川が十二番から、とは江戸板木繪は、師宣頃の好色畫から始まつて、夫から二百餘年に亙つて江戸に榮えた板木繪は、みな萬治寛文の、あの投節の耽美主義的な調(シラベ)をたゝへた繪畫の流れであると言ふのである。そしてそこには、美の時代的變遷も見られると言ふのである。

もの軟かい綿に近い日本の紙に、古い木彫の傳統をもつ技術によつて木板に彫り上げられた刻線、毛筆の優しい曲線の中にも仕上げられた嚴(キビ)しさを以つて、墨一色に摺り上げられた板木繪、その單純な快調は、陶磁の持つ半ば自然的な美しさよりも、一層人の心に美しい印象を與へる。

江戸板木繪も、東洋畫の線畫であり、古い大和繪の所謂引目、鉤鼻の「造り繪」傳統のものである、夫に扇面、小袖の衣裳紋様系である「模様繪」の傳統をも強く引いてゐる。

德川の時代は、絕對武力、を以つて武士階級により治められた時代なのであるから、帶刀の武士階級以外の「切捨御免」の庶民階級といふものは、夫こそこの單純政治の埒外の階級であつて、彼等は、こうした政治の下に、武家の御膝元たる江戸に、彼等自身の社會をもち始めたのであつた。

彼等の築いた文藝の中には、表現様式の單純性、含まれる意味內容の多様性、夫に、知性的で無いこと、好色性との、四ツの特

質が殊に目立つて覗はれるように思はれる。

江戸板木繪、殊に此期の墨摺繪といふものは、夫こそ西洋畫法の「實物を眼前に見るやうに」畫く迫眞描寫法とは違つて、唯、感情を、夫も彼等の認識經驗の中に堆積せられた印象を、深刻な効果を目標とした大膽な輪廓圖表として、臨機應變に造り繪する「繪空ごと」の極めて暗示的な表現技巧を以つてするのである。こう述べると復雜のようであるが、實は、墨線だけなのである。生命が息づいてゐる極めて暗示的な表現の秘密！　夫こそは線それ自身が語るところのものである。墨線だけで出來上つてゐることが解つた。

こゝに、表現内容のことが、問題となる。永い歴史と古い文化遺産とを多く保持してきた島國日本にあつては、江戸庶民の如き全く新興の階級社會の中にも、頗る微妙な心情の多樣性を直に發生せしめたのであらう。現世的なものの見方は、日本の深い自然觀と結び付いて、遊びの道も、通すことに依つて純粋化しつゞけて行く、無限に耽れて行く、嚴しい途であつた。單純な江戸政治の社會的法度に直面しては、「心中」は「あの世」の肯定までつゞいて、後には、否定の中に生きる、柳里恭の「ひとり寢」の如き「遊び」の哲學、まで生むに到つてゐる。

古くから日本の庶民大衆は、「學問のすゝめ」以前、教育せられざる階級としての歴史をもつ。無知は、初めからのものである。然るに、早くから論理的な頭腦を有つてゐた西洋人は、彼等の視覺體驗をも組織的に整理して、現實相の秩序整然たる客觀的認識に到達した。併し今日、彼等の中にも、知性を超へて、視覺の中に美を求めんとする、本能や情緒と、美の發現との關係、を追求するアバンギヤルトの、如きものがあらはれて來てゐる。

今日の藝術は、表現技術の末端化と、内容の貧困さとを唱えられてゐる。或は人間解體の藝術であると認めてゐる者もある。美とは、結局、人間性を超え得ぬものであらうか！

江戸板木繪が、當初からもつ無知性の上に遂げた藝術が、線的單純表現のゆえに伸展する全體性と、含む意味内容の豐富さとは、今日の藝術との對決に於いて、何物かを明日にプラスするものとなり得るであらうか。

「色道」の問題は、[註一]江戸以前、既に上方に在つて現はれてゐる。この種の板木繪は、明末に大陸から我國に輸入された「黃素妙論」

Moronobu. kyara makura.

系と、日本系と思はれる「四十八通あすの事」の流れになるものであつた。多く、壽命、延命希願に名をとつたもので、未だ「樂事」のことは、さまで表面化してゐなかつた。處が、江戸初發時代に於いて、「色道」の問題は俄然活況を呈して來た。

「德」を以つて德川の政治理想としたのは、或は正しかつたかも知らぬ、併し、唯武力に依る單純政治の、思想的施行處致の貧困さが、一擧に城下庶民の、人間復興と言ふか、人間性の誕生に當面した時、夫は德川幕府の大きな盲點となつた。

「壽」の道として、既に發生して來てゐるものを、この度は、「天地かいびやくの根元」「人は陰陽和合によりて生す」と生命の根本問題を提げて來てゐるのであるから、「人間樂事」としての遊興、その淫亂が政治的に社會的にも弊害を伴ふことは、みす〳〵見へすいてゐるが、「しか在ともすてゝもおかれず」「人に七情あり、人倫の氣質ははかりがたきもの」であるから「德」の道に准へてならマア〳〵と言ふところであらう。「心をみがき」「用捨分別在度事」であるとして、「慮」を以つて「やめがたきかのまどひのひとつ」は遂に德川の德政の關門を突破してゐるのである。

戀愛は一應不義と認め、法度の埒外へ追ひやつた政治思想の下にあつて、新吉原、芝居四座の如き遊所の認許が、埒外の存在として既に設けられてあつた。こゝに、大きく人間樂事、遊興、心の慰、諸人の心を散じ、よろこばしめ 我もなぐさまん、と言ふ「浮世らくあそび」の思想が浮び上つて來たのである。遽に、花街と演劇とが、江戸に興隆してきたのもこの爲である。

吉兵衞と次兵衞、それから庄兵衞らが、烏滸がましくも、大和繪師と、作品に名乘り初めてから

大和繪　菱川吉兵衞　延寶五歳己正月日　小むらさき、松會開板

大和繪師　杉村次兵衞圖　延寶九年酉　新板浮世れんぼらくあそび、藪田開板

大和繪師　庄兵衞圖　貞享四丁卯歳仲秋下旬　色の滿衣、

近江屋重兵衛板行

江戸板木繪最初の開花期とも言ふ可き期間は、正徳の終り頃までの、凡そ四十年程つゞいた。

署名なき挿繪入の吉原本は、引つゞいて此期に入つても

延寶五年、芥子鹿子

延寶六年丙午正月吉辰、山茶よし垣、通油町

延寶八庚申孟春、さん茶評判　胡椒頭巾、鶴屋

延寶九年孟春日、吉原三茶三幅一對、升屋開板

天和三の年、吉原鏡ヶ池、堺町　正本屋十右衞門

貞享四卯暦、山茶東雲、大傳馬三町目

等が開板せられてゐる。

こゝで、江戸に於ける此期の板元の地理的分布を一瞥して置かう。

江戸草分け時代の主なる板元十一軒の外、この期になると以下のような板元が各處に見られる

通り油町　升屋平兵衞（a）　山形屋市郎右衞門（g）　藪田清兵衞　井筒屋三右衞門　伊勢屋伊兵衞　相模屋太兵衞　中屋　藤田　板木屋長次郎　板木屋四郎右衞門額彫師　板木屋甚九郎（川崎）ガクボリ　板木屋市左衞門エホリ　板木屋又兵衞ガクボリ

大傳馬町　鶴屋喜右衞門（b）　鱗形屋三左衞門（d）　山本九左衞門（丸屋）（f）　三河屋七右衞門　柏屋仁右衞門　同與市　天和二年戌初秋堺町　木下甚右衞門

小傳馬三町目　もすや十右衞門南横町（k）　かいふや東よこ丁

堺町　板木屋七郎兵衞（j）　中島屋伊左衞門　伊勢屋次兵衞堺町横店

長谷川町　松會三四郎（e）　栗原長右衞門　近江屋九兵衞　利兵衞　加兵衞エホリ

横山同朋町　ふじや（h）　竹田長右衞門

元濱町　伊賀屋

通鹽町　七兵衞（i）

富澤町　村上源兵衞

和泉町　板木屋七郎兵衞堺町前住

大門通田所町　松屋彌兵衞

やくし堂前　善右衞門ガクボリ

神田新革屋町　西村利右衞門

馬喰町三町目　和泉屋五郎八
おやぢ橋葺屋町　酒田屋
淺草橋通瓦町　表紙屋市郎兵衞（山口）
淺草田町　辻五兵衞
淺草駒形町　菊屋
駒込あさか町　西村傳兵衞
湯島天神女坂下小松屋
天神前　小寺長兵衞
石町十間棚　野田太兵衞
川瀬石町　山口屋　須藤權兵衞
日本橋南二町目　新介
京橋銀座一丁目　大吉屋吉右衞門
尾張町二　かぢや源七
竹河町　末廣忠五郎
木挽町　ゑさうしや三左衞門　山本小兵衞
新橋南、日比谷横町　板木屋又右衞門（c）　本屋彦兵衞
芝神明前　山田屋三四郎　ますや重三郎　江見屋　菱屋市兵衞

この外、場處の未詳のものに、わしや、さうしや權右衞門、北野屋次郎兵衞、松坂屋喜兵衞、鎗屋平右衞門、松葉屋清兵衞、板木屋七郎右衞門等がある。

その他、書林とて、佛書、唐本、詩集和歌、儒醫の書籍を扱つてゐた書賈は、日本橋通り本町筋に多く在つた。その中で、西鶴浮世草子の江戸板元、又は江戸板好色本類の開板書肆をあげてみれば、

日本橋南一丁目　梅村八兵衞
平野屋清三郎　好色盛衰記　貞享五年
日本橋南二町目　川崎七郎兵衞　川瀬石町　一代男　貞享元甲子歷三月上旬
大津屋四郎兵衞　青物町　二代男　貞享四丁卯歷九月上旬
萬屋清兵衞　青物町　一代男　貞享四丁卯歷九月上旬
利倉屋喜兵衞　青物町
同　小太郎　男色義理物語　元祿十二年巳卯正月吉日
近江屋重兵衞
翠簾屋亦右衞門　南佐内町
石町十間棚　三河屋久兵衞　諸艶大鑑　貞享元年
大傳馬三町目　志村孫七　彼岸櫻　朝くれなゐ

最初に、板木繪師として[註三]繪師菱河吉兵衞の名が現はれて來たのは、延寶度に入つた「伽羅枕」からであつた。彼が「師宣」を、

多く用ひ出したのは天和二、三年頃からであるように思はれる、尤も柏屋板の繪本には、延寶六年に遡上つて「師宣」と落歎したものが在るが、延寶度の柏屋本は、多くその刊記書體から見て初板本と斷じ兼ねるものばかしである。

師宣の名は、餘りに有名であり、從來、師宣の繪本と言はれるものは、百四五十點にのぼつた。その中在名のものは六十點に過ぎ無い。この六十點の作品の中でも、約三分之一は、地誌又は、かな草紙類の、繪が主要でない刊行物である。あとの半分が、通俗な繪本であつて、殘りは總て、色道の繪本即ち枕繪本である。無落款の作品をも加へると、師宣の枕繪本は三十四五點に達し、尚最も繪を主とした卷物又は帖仕立の大判畫揃物の枕繪、を加へると、師宣畫く枕繪作品は、實に夥しい數であつて、彼の作畫の主力が、この枕繪に、注がれてゐたことが解かる。

江戸草分け當初の第一流の地本問屋、鶴屋、本平升屋、松會、鱗形屋、に依つて、早くから板木繪の仕事に從事した、吉兵衞、は一面保守的な思想と、堅實な技術とを以つて、次々と、數多くの作品を、開板することを得た。通俗和歌文學めいた繪本、と、やゝ上品な枕繪作品との多作に依つて、師宣は江戸初代の板木繪師としての名聲を博することを得た。

元祿二年刊、江戸圖鑑綱目、浮世繪師之部には

町橘　菱川吉兵衞師宣
所同　菱川吉左衞門師房

と出てゐる。[註六]好色本「好色一もとすゝき」には元祿十三年辰正月吉日、大和繪師　菱川師房、の刊記がある。

江戸から深く入り江を扼した安房の保田町　に在る別願院境內には、「元祿七甲戌年五月吉日、寄進施主、菱川吉兵衞尉藤原師宣入道友竹」と鐫銘のある鐘がある。一と夏、保田海岸に過した砌り私もこの鐘を見た。保田町は、吉兵衞の故郷でゞもあらうか、江戸に出て名を擧げた師宣が、鐘の寄進に依つて、師宣が、貞享、元祿の、堺町橫町、橘町に於ける當年の江戸居住のありさまも、

Uncertain.

大方は想ひ廻らされるのである。

江戸板木繪最古の大々判横繪類は、多く師宣の板畫であると思はれてゐた。わが國立博物館藏の大々判横繪五點はいま以つて師宣とされてゐるが、全部師宣ではない。「かしわきのゑもん」「鳳凰丸舟遊」「牛若丸淨瑠璃」、ルーブル博物館のCurator G. Migeon, Rep. PL. 17「春夏秋冬」や、Lemoisne の著書 L'Estampe Japonaise.「清水詣」、Vever 蒐集の「女軍騎馬圖（アマゾンネ）」「梅見の男女圖」、昭和六年十月錦交會目錄第四圖「淨瑠璃姫舞臺と小柴垣外の圖」そして竪大々判の vignier 蒐集「扇の的」や戰後發見された「旗幟の圖」等は、實は、いづれも杉村次兵衞の板畫と鑑識せられるもので、中には明瞭に「杉村」と署名のあるものさへある。墨摺大々判横繪にも「花見圖」Bing Collection, Vignier Cat. E.P.J. No. 13. の如き師重と推定せられるものもある。

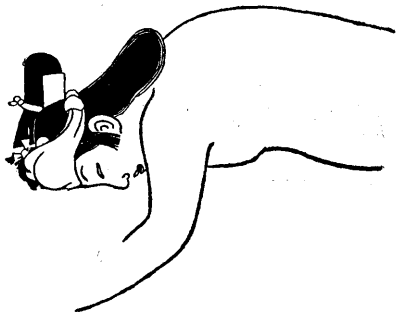
Sugimura.

大和繪師杉村次兵衞、は延寶九年の「新板浮世繪つくし」と「百人一首季吟抄」以後、その署名落款を作品の上にあらはしてくる。作品は、通油町の藪田清兵衞、井筒屋三右衞門、板木屋長次郎、大傳馬町三丁目の三河屋七右衞門、あたりから多く開板せられた。それから川瀨石町の山口屋、南佐内町の翠簾屋亦右衞門の如き書林書屋からも、「御成敗式目繪抄」元祿十丁丑歲正月吉祥日、繪師杉村次兵衞、須藤權兵衞」「好色大黑舞」元祿九丙子正月吉日、翠簾屋亦右衞門板」の如き挿繪本を出してゐる。

次兵衞の關係した板元は、地本問屋としての格から云つて、到底、師宣の關係した板元とは比較にならぬ。次兵衞は、油町界隈の板木屋から、歌、物語等による常套畫題の横繪大々判畫を畫いて童蒙の需要に應じた。彼の「枕繪」に於ける作畫態度は俳諧狂歌の立場に據つてバレた姿型の中に、樣式よりも眞實に迫らんとする類のものであつた。こゝが高踏的和歌的立場の師宣と、土臭的立場の彼との異るところである。

こゝに最も注目に價する江戸初發の枕繪大判畫！　は延寶から貞享にかけて最高潮に達した。こゝに於いて日本の繪畫史は、初めて多くの、大畫面としての人體描寫を持つ、てくることになるのである。私が特に强調したいのは、日本人の人體の官能描寫の

勃興と言ふことである。夫等はよし、枕繪として現はれてきたとは謂、そこに性意識を超へて、人體への美的なものへの追求が明らかに認められると言ふ事である。出發は或は違つていたかもしれぬが、古代ギリシヤ人の人體に對する藝術の境地と同格の境地である。日本の藝術表現の手段は、官能的人體追求への純化が線の描寫により行はれ、描線の純化の道が、唯一條の線なのである。その一本の線に　全部を犧牲にして生き延びる願ひ、そこに日本の過去の命を見るのである。その缺點も特色も！



Sugimura.

この人體描寫の枕畫、これこそ此期の板木下繪師が、期せずして得た畫技練磨の道場とも言ふ可きである。こゝに赤裸々な庶民の構に、加ふるに官覺にすぐれた天分を以つて、數多く畫いた者に杉村次兵衞がある。彼は何よりも先づ畫家であつた。

初期横繪大々判畫も、又大判枕繪も、師宣は、あまり多く畫ていない。師宣とは多く本に畫いた繪本繪師であつた。

この意味では杉村次兵衞こそ、江戸板木繪最初の繪師であるとも謂へるのである。

江戸大歌舞伎の劇形成も未だ定かならない　役者色氣本位の創生時代！　西鶴が文學上に、「一代男」によつて鎖國日本の、知れざる海外に向つて發向し行く町人の氣慨を示しえた夫より以前、江戸には江戸庶民の明朗闊達な氣魄を示し得た繪畫の存在があつのである。この板木繪藝術こそ、最も注目に價するものと言ふ可きであらう。

江戸圖鑑綱目、板木下繪師の部には

長谷川町　古山太郎兵衞師重
淺草　石川伊左衞門俊之
通油町　杉村治兵衞正高
橘町　菱川作之亟師永

と、師宣師房とは一行へだてゝ古山師重、石川流宣よりも下位に、杉村治兵衞、の名が記されてゐる。「綱目」の編者は石川伊左衞門流宣である。大和繪師古山太郎兵衞は「貞享三年丙寅八月吉日」と年記ある枕畫の作品に於いて、日本繪師、菱河葉師重を名乘つ

て居り、流舟石川伊左衞門また流宜、河末軒の號を用ひたこともある。共に菱川の流門に籍を置いた者であらう。

師重も亦比較的早く、貞享の頃には、大判枕畫を、板元北野屋次郎兵衞、松屋伊兵衞から開板してゐる。彼は時に杉村次兵衞の圖をそのまゝ剽竊してゐることさへある。繪師としての天稟は次兵衞の官覺なく、吉兵衞の堅實技術にとをく及ばない。元祿八年亥三月中旬、長谷川町利兵衞開板「好色旅枕」に於いて「大和繪師、古山太郎兵衞」と再び古山に立ち戻つてゐる。元祿七年寄進の鐘といひ、師宣がこの頃に沒したのは事實であらう。

油町の相模屋太兵衞は、圖工としての「流舟」の圖板類を多く開板してゐる。寶永頃にも、流舟は、日本橋南にある書林、須原屋茂兵衞、本屋一兵衞の圖本類を畫いてゐる。

·Sugimura·

貞享四丁卯歳仲秋下旬、作者松月堂不角、の浮世草紙、[註五]「色のまゝ衣」は、日本橋南二町目式部小路、近江屋重兵衞の板行である。「大和繪師庄兵衞畫」とある。元祿十丑年正月吉旦の「好色大福帳」には、「鳥居庄兵衞畫」とある。元祿十三歳辰の三月吉日「風流四方屛風」の序に、「和畫工、鳥居庄兵衞清信圖」とある。元祿も十三年に到つて、清信は、はじめて名を現はして來る。

言ふ迄もなく、鳥居は、江戸時代を通して今日に及ぶ、歌舞伎芝居繪の家柄である。江戸芝居演劇の主流をなしたと看做される市川家の荒事狂言の始りは、延寶初年頃から在つたのだと言はれてゐるが、實際に演劇の態を形造つて來たのは、狂言題名の如きものが明瞭になつてきた元祿初年頃からではなからうか。落款を逸してはゐるが元祿癸酉の「古今四場居百人一首」は何處となく幼稚な力強さの籠つた畫風に依つて、この畫工は、鳥居庄兵衞であらうと云はれてゐる。

江戸歌舞伎四場居とは、堺町にある、勘三郎・竹之亟　兩座、木挽町に在つた長太夫・勘彌　兩座の四座の事である。このうち山村長太夫座が正德四年に斷絶してから、所謂江戸三座となつた

わけである。

堺町の中村座專屬と見られる芝居筋書繪本の板元は、土地柄、堺町南横町の「もづや十右衞門」であつた。貞享三年正月狂言の、椀久浮世十界、が遺つてゐる。元祿十年頃になると、專屬の芝居正本の板元は、堺町東横丁の「かいふや」と更つてゐる。元祿十年二月、同五月、元祿十一年三月、同八月、元祿十四年正月、の芝居正本が遺つてゐる。

堺町の市村座專屬の板元は、元祿十六年七月の芝居正本には、馬喰町三、和泉屋五郎八、とあつたが、寶永二年四月と寶永五年三月の芝居正本をみると、さかひ町「中島や」となつた。

木挽町の山村座、の專屬の芝居正本の板元は、木挽町の「ゑさうしや三左衞門」鱗形屋　である。元祿十二年六月、同十三年三月、のものを見ると木挽町五丁目となつてゐるが、元祿十四年正月、以後のものには木挽町六丁目、となつてゐる。元祿十五年七月、同八月、元祿十六年正月、寶永元年二月、同七月、寶永二年四月、寶永四年正月の芝居正本又は山村座關係外記節正本が架藏にもある。

同じく木挽町の森田座專屬の板元は、木挽町三丁目、正本屋「山本小兵衞」であつた。元祿十三年正月、同三月、元祿十四年七月、元祿十六年四月、同七月、の芝居正本が遺つてゐる。

斯く見きたると、繪入り芝居狂言正本遺品の統計にあらはれた江戸四座の、所謂元祿大歌舞伎の全盛といふものは、元祿十年或は、十二・三年頃からと云ふことになる。正に「風流四方屛風」開板の年に當る。鳥居庄兵衞清信の大判畫も、大體この時代からのものと見られるのである。

丁度、十八世紀の開幕である。延寶以來、社會の內面を流行して來た「枕繪」も、世間に表立つて行はれてゐた横繪大々判畫も、共に社會表裏一體の流として、甚だ盛んであつた此期も十八世紀に入るや俄然畫の格調を變へて豪華な流行を顯してくるのである。

曾て、淨瑠璃物語り類の世俗的常套畫題を以つて流行して來た大々判横繪は、こゝに元祿歌舞伎俳優の舞臺に於ける動作のムーブメントとか、眼前に見る着飾つた衣裳と云ふような、「視的テーマ」を持つようになつた

大和筆　品畫司　鳥居清信

日本婵娟畫　鳥居氏清倍圖

日本戲畫　懷月末葉　度繁圖

日本戲畫　懷月末葉　安知圖

日本戲畫　懷月末葉　度辰圖

東武　大和畫師　奥村政信圖
東武　大和画工　奥村利信筆

の如きおそろしく長い署名をもつた人物姿繪の大々判畫があらはれて來た。品畫司（ヒナエシ）とか、嬋娟（センケン）畫と言ふのは、江戸板木繪最初の枕繪作品中に、しばしば見る、「今繪の品」「繼の品枕繪」「七情のしなしなの品枕」の品であり、結局は、源氏物語帚木卷　雨夜の品定め、以來の用語意味であるであらう。所謂、別品（ベツピン）さんの畫、紙雛（ヒナ）の繪師と言ふ意味でもある。嬋娟とは又「多く女子を以て比す、色態の愛す可きを形容せるなり」と字典に出てゐる。

清信が、板木屋七郎兵衞から、かゝる大々判畫を開板すれば、清倍また、伊賀屋に據つて同じ時代流行の、書き文字衣裳人物の作品を開板してゐる。

元祿の華麗な衣裝に對する嗜好の流行は、之をかの光琳の梅花小袖繪屏風二枚折一雙や、冬木小袖の實物遺品に依つても知るのであるが、我々は、かゝる世俗的な墨摺大判板畫に依つて、元祿[註七]の絢爛豪華な衣裳の流行が如何なるものであり、夫を拍采を以て迎へた江戸庶民大衆の眼が、かゝる片々たる一板畫の中にも開けて來た「視的」向上を覗つて、眞の元祿の世の姿と言ふものが解るやうに思はれる。

その「品畫」に於ける人體的、又は舞臺畫に於けるムーブメント、の如きものを一式開却して、只管に、衣裳繪の本領を完全に發揮したものが、懷月末葉の板木繪である。

人物は恰も衣裳を着せられたデパートのマネキン人型の如く、唯窈窕たる顏と、手足、に過ぎない。雛人形でも我國のものは、體と衣裳とは別で、ほんものの絹製の衣裳を纏ふてゐる場合が多い。懷月末葉の板木繪は、マイセン製陶人形では無くして、日本の雛人形である。一葉の墨線板畫にして人物と衣裳とが完く融着し無い處が、大變面白いと私は思ふ。

この最も獨特な、日本戲畫懷月末葉　を冠する大判板畫には、度繁、安知、度辰、の三人がある。夫々伊賀屋、丸屋、中屋、から開板せられてゐる。伊賀屋板十二種、丸屋板五種、中屋板三種である。尙、板元不明の、安知、

Kiyonobu.

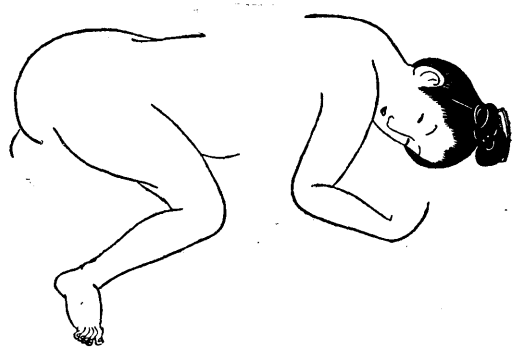
度繁、のもの各一圖づゝと、伊賀屋板中には　安知　のものが一圖ある。之が今、世に知られてゐる懷月末葉大判の全圖數である。

清信は、その初めに於いて、貞享から元祿十年頃にかけて、浮世草子の插繪の仕事をしてゐる。

清信は、和泉町板木屋七郎兵衞、長谷川町近江屋、湯島天神女坂下の小松屋、横山同朋町竹田長右衞門、あたりから彼の作品を開板してゐる。彼の元祿十二三年頃の作と思はれる中判墨摺繪のその衣裳模樣の中に「冠初心附」とか「萬句寄、五千句」などの文字が在る。清信が初め浮世草子の仕事や、この文字からして俳人との關係があつたであらうことは充分推察が出來るのである。併し彼は、前句附や俳諧の書讃の如き文字の書入れを、彼の板木繪の畫面の中には許さなかつた。彼の畫風は、どこか元祿歌舞伎の豪快な荒事所作の力強さを偲ばせる。枕繪に於いて彼の描いた人體は、もつとも力強いものであつて、太肉の量感、明快な構圖に依る隱(コモ)つた堅實さ、は清信の特質である。彼は、元祿歌舞伎が生むだ「力動」の畫家と謂ふことが出來る。併し、古淨瑠璃正本歌舞伎正本、に於ける無署名、板木下畫工の工房から、如何にして「鳥居」が擡頭して來たかの歷史的解決に於いては、清信の板元の版圖は、之を說明するに不充分である。

然るに、文字衣裳の大判畫に於いて、「日本嬶娼畫鳥居氏清倍」を以つて、「品畫司清信」に、頡頏してゐる清倍は、堺町市村座附正本板元、中島屋　から、そして伊賀屋　に據り、又は、江見屋、小松屋から、役者繪の大判畫を、數多く開板してゐる。市村座、中村座、森田座の辻番附で遺存してゐるものにはいづれも、清倍の落款がある。或は、清倍こそ、歌舞伎　座附正本類の板木下畫工の正嫡を唱ふる者ではなかつたか。「鳥居」とは、歌舞伎に關する古正本以來の、無名板木下畫工群の主流、から出て來たものであつて、鳥居の名籍が永く芝居道と結び付いて、株として重要視せられ始めたのも亦、この頃ではなかつたか。このことの決定に就ては尙、古芝居正本搜索に遡つた結果、に俟つことゝしやう。

奥村政信は、「元祿十三歲辰四月吉日　娼妓畫帖」以來、清信に倣つた畫工であつた。「娼妓畫帖」とは、年々に娼妓封傳(ケイセイフウデンキッテ)として、



Masanobu.　　Neya no hinagata.

吉原鑑、吉原丸鑑、の如き吉原本の系類で、その「入替」を改めた畫本であつたのであらう。

政信にも、大々判一人立美人畫はある。駒込あさか町西村傳兵衞、開板のものである。眼前の美人としてゞは無い、畫題的要素を多分に含むだ、常套的域を脫しないものである。衣裳繪としても聊か粗強の憾を免れぬ作品である。

彼も亦、清信に似て、浮世草子の挿繪の仕事を行つてゐる。日本橋南　の書林山口屋須藤、からは、元祿十五午ノ九月吉日、遊里太鼓、同、梅村八兵衞、からは、元祿十六年癸未正月吉日、好色花ずまふ、同、萬屋清兵衞、からは、寶永二乙酉歳正月吉日、好色又寢の床、芝神明前の山田屋三四郎からは、寶永四年和漢善惡男色比翼鳥、駿河町の　泉長兵衞、からは、寶永五年三月、關東名殘袂、が彼の挿繪をもつて開板されてゐる。政信は、挿繪の仕事を始めた頭初から、一板繪の仕事をも同時にはじめてゐる。こゝが、清信が最初のうちに浮世草子の挿繪の仕事に從ひ暫くして板木繪に活動し出したのと違ふ點である。政信は、草子の挿繪の仕事を、彼の板木繪の仕事と平行して、永く次の時代に亙る、彼の長壽の生涯を通して行つてゐる。

寶永正德の時代に於いて、政信は實に多作の墨摺板畫を畫いてゐる。大判、中判の墨摺枕繪にも、「武江畫師、奥村政信圖」、西村傳兵衞板」「大和繪師、奥村政信圖」、日本橋川瀨石町、山口屋、書林、須藤權兵衞」「奥村政信圖圖」、元はま丁、はんもと、いが屋」その他「和書工」「大和畫師、奥村政信圖圖」「風流大和繪師奥村政信圖之圖」と、實に堂々とした刊記署名の、そして板元名迄明記されてゐる作品がある。これこそ此期の爛熟を示す世相のあらはれの一つであらう。

政信の板木繪には、頭初の墨摺判、から既に、畫面の中に、前句附、俳句等の、文字の書込讃　が在るものが多い。政信の板木繪と俳諧文學との關係には、親密なものが生じてゐる。曾て貞享の浮世草子にして清信が畫いたものの作者、俳諧師でもあらうか

「松月堂不角」の文學の流れを引くのであらう、政信は後に「芳月堂文角」と署名をするようになつた。そして江戸板木繪は永く、俳諧との強い關係を生ずることゝなるのである。

政信は、次の時代になると「赤ひようたん印　奥村」と自ら板元業をも開いてゐる。數多くの書籍插繪の仕事と竝んで、自家開板の、漆繪紅繪類の一枚繪をも夥しく畫いた畫家であつた。「闇の雛形」は政信の傑作であつて、享保に入つた時期の作畫ではあるが、墨摺大判全盛期の名殘を十分にとゞめてゐる干潟的存在と言ふことが出來ようか。

奥村利信も、大々判板畫を遺してゐる。芝神明前　ますや開板の甚だ色氣ある、立姿の化粧美人畫、である。その揚羽蝶の紋所により、享保二年市村座の「お七にて　その名あげはの　蝶の袖」と唱はれた三條勘太郎　扮するお七の、所謂「色子」の役者繪、である。

尙、この大判時代の作品として認められるものに、羽川珍重筆稿　と署名のある「江戸町　西田屋内、ここのゑ」の如き遊女美人繪がある。珍重は「享保二丁酉歳正月吉祥日、山本九左衞門板、富士權現筑波由來」「享保五年子正月、吉原丸鑑」「享保七年、木下甚右衞門板、大嶽丸」に畫いてゐる。そして　享保八年卯正月吉日、鶴屋板　大八島、には羽川元信とある。

正徳のをはり頃には、既に、山村座斷絶の如き享保改革の前振れは始まつてゐた。遠く　上方でも享保改革に依つて、漸く、大和畫師　西川祐信が、「享保八ッの卯の羽がさねのとし花の孟春」と筆毛を伸した「百人女郎品定」が禁書となつた。

さしも盛んであつた　この江戸板木繪第一回の開花期も、こゝに退潮の時を迎へることゝなつた。

一九五二・九・二六日稿

註一　江戸以前、昭和二十一年末に原稿を吉田暎二氏に手交したが未だ印刷の運びに到らぬ。いづれは發表されることゝ思ふ。

註二　江戸板木繪之出發　十一板元　a—k.藝術學報二號　所載

註三　師宣の最初の在刊年記繪本「小むらさき」
圖版　四ノ一　參照

註四　杉村次兵衞の插繪ある本、刊記
圖版　四ノ二　參照

註五　清信の插繪ある浮世草子、刊記
圖版　四ノ三　參照

註六　師房の插繪好色本、刊記
圖版　四ノ四　參照

註七　墨摺大判堅繪一人立美人圖、無落款
圖版　五　參照